

# 上海の都市形成期における言語景観

## —歴史社会言語学の事例研究—

彭 国 躍

### Abstract

Linguistic landscape (LL) is one of the most exciting, attractive growing branches in the realm of sociolinguistics. Since the end of the last century, many cases of LL have been reported from all over the world. In order to deepen the theoretical exploration and support the historical study on this field, we need more cases describing LL in various areas and periods from different perspectives.

In this paper, we investigate the actual situation of the LL in early modern Shanghai through the analysis of the old photographs of Shanghai shopping districts taken during the 40 years from 1890 to 1929.

First of all, we classify the shop signs into two basic types according to the kind of language, the design of the sign board, and the meaning of the words used in the LL. The one type is the Chinese traditional style which also had been used in many cities before the 19th century in China. The other is the modernized style influenced by western culture. After describing the contents of each case of the LL, we explain the characteristics of the LL from historical sociolinguistic perspectives as follows: (1) multilingual society, (2) language prestige and norm, (3) language change, (4) form of industry, (5) style of architecture, and (6) market economy.

キーワード：看板 類型化 言語景観 社会的関数  
多言語社会

### 1. はじめに

Hymes (1974 : 66) は、かつて「Sociolinguistic description and taxonomy are joint conditions of success for understanding and explaining the interaction of language and social life.」(言語と社会生活の相互作用をうまく理解し説明するためには、社会言語学的記述と分類が合同の条件なの

である) (唐須訳 1979: 95) と指摘し, さまざまな社会言語学的現象の考察には初めての秩序化, 類型化と合理的な解釈が先行する必要があることを唱えた。20 世紀末頃から言語景観研究のフロントランナーたちはカナダ (Landry and Bourhis 1997), イスラエル (Ben-Rafael et al 2006), バンコク (Huebner 2006), 東京 (Backhaus 2007), エチオピア (Lanza and Woldemariam 2009) など世界各地で言語景観データの収集, 分類と社会言語学的な解釈という合同作業の試みが繰り返されてきた。近年, 言語景観は, ことばと社会の関係を示すパラメータとして広く注目され, それに関する研究調査も言語接触, 言語威信, 言語政策, 民族紛争と移民問題など多くの関連分野とのかかわりにおいて新しい展開を見せながら, さまざまな問題や課題を提起している。言語景観の通時的考察や比較研究などさらなる発展を遂げるためには, より多くの異なる時代, 異なる社会の言語景観の事例収集, 実態把握と記述分析が求められる。

本研究は, 歴史社会言語学の視点から百年前頃の中国上海の都市形成期における言語景観の画像データを収集・整理し, その実態を記述し, 言語景観の類型化を図ると同時に, それに影響を与えたさまざまな社会的関数要因について考察することを目的とする。

## 2. 研究概要

### 2.1 写真資料の時代背景

百年ぐらい前の近代中国は, 清王朝 (1636 ~ 1911) から中華民国 (1912 ~ 1948)<sup>1</sup>へと国家体制が大きく移り変わる時代であった。清末民初といわれるその時期は, 東洋と西洋が激しくぶつかり, 中国社会における世界観, 価値観や生活様式などが目まぐるしく変化する時代でもあった。アヘン戦争後の 1842 年に清朝政府と英国との間で「南京条約」が結ばれ, それにより上海は通商開港の地となった。1845 年租界開設とその後の度重なる拡張と増設により, 欧米の人や物と共に, 西洋の社会や経済の仕組み, 建築や生活の様式などが押し寄せた。1850 年代頃太平天国の乱などにより上海の周辺地域から富を持つ人々や一般市民が庇護を求めて租界に流入した。上海の租界地区はしだいに当初の『租地章程』(1845 年)に規定されたイギリス人居住地から大きく変容し, 1863 年の共同租界の設立以降上海はますます中国文化と西洋文化の衝突と融合の先頭に立つようになった。

19 世紀の中頃から世界ではカメラの発明, 改良と普及に伴い, 映像文化

が興起し、歴史記録の新しい時代が始まった。上海の都市景観の形成時期はほぼカメラが中国に持ち込まれた時期と重なっていた。その頃の上海の景観は、訪れた旅行探検家、外交官、商人および清朝御用洋学者などによりカメラに収められていた。これらの写真は上海の言語景観の歴史を研究する上で欠かせない貴重なデータソースとなっている。発見された歴史写真の中で1880年代までは河川、寺院や人家などの風景が映ることはあるが、文字情報が識別できるような景観はほとんど見られなかった。1890年代以降は租界地域の商店街の形成と拡大に伴い言語景観が写真に映るようになった。それらは上海の言語景観が形成する過程における最も古い時代の画像だと言える。したがって、本研究の対象は1890～1929年、つまり清王朝最後の22年と中華民国最初の18年を合わせた40年間の写真に絞ることにする。

## 2.2 本研究の方法

言語景観の全体像を正確に捉えるためには、Hult(2009:101)が指摘したように、質的分析と量的分析を併用することが方法論的に望ましい。ところが、歴史的な課題については、考古学や歴史学がすでに実践しているように、発見された一つひとつの文物や史料に基づく質的研究が先行する必要がある。歴史写真に映った言語景観は、その場所、時期、規模、数量などにおいて偶然性は避けられない。そのため、発見された写真に対して定量的な統計が求める同質条件による数値の比較分析は困難である。しかし、写真は、かつてそのような景観が確実に存在したことを証明し、消えた歴史的事実への洞察を可能にしてくれるので、それが歴史社会言語学において大きな重みをもつことは明らかである。したがって、本研究は質的な分析、つまり発見された写真画像が示す個々の言語景観の事実に対する分類、記述と考察に力点を置くことにする。

言語景観の研究では、一般的な傾向として都市景観が主に扱われる。都市の言語景観には、商業施設の看板、道路標識や各種政治的、宗教的な掲示物などさまざまな要素が含まれるが、言語景観が映った歴史写真には市街区の商店街における看板が大きなウェートを占めている。そのため、本論の考察も結果として主に商業施設の看板にフォーカスを当てることになる。

### 2.3 本研究の構成

本研究は基本的に次の3つの部分によって構成される。

#### (1) 写真画像の収集と整理

近代都市上海は、一部の旧市街地（かつての南市区、現黄浦区の一部）を除き1845年の開港以降に形成したものである。筆者は、書籍、雑誌、絵葉書など各種出版印刷物やネット検索画像から上海の歴史的言語景観写真を563枚収集した。本論の事例分析に使用される写真（19枚）は、すべてその中から1890～1929年間の撮影と推定されたものを選んだものである。出典文献に具体的な撮影年のある場合は信頼性を確認した上でその記述に従うが、撮影年が不明なもの、明らかに記載に誤りがあるものまたは複数の文献に異なる表記があるものについては、筆者がその画像内容（道路交通、電力施設、建物などの建造年代や商店、会社の創設年代および国旗、スローガン、人物の衣装や辮髪などの要素）に基づいて推定した。

写真の収集と整理の過程において言語景観の文字情報が確認できるように、一部必要に応じて余白のカットなど画像の拡大処理を行った。

#### (2) 景観内容の確認、分類と記述

画像の文字情報の確認には主に2つの方法が使われる。1つは不鮮明な文字画像の拡大や旗の反対側の文字の反転などによる確認作業、もう1つは一部判読できない文字内容を角度が異なる複数の写真との比較による照合作業である。古い新聞、地図など歴史文献に掲載された情報も参考となるが、本論文で議論の対象となる言語文字情報はすべて写真画像で確認されたものに基づく。

近代上海の言語景観の基本的なスタイルについて、その形成過程における文化的背景、店舗形態および言語の使用状況などに基づいて分類を行う。画像に示された言語、文字、書体、意味内容、媒体などの諸要素の特徴や景観の形成と消滅に関する歴史的経緯などについて記述と解説を行った後、類型ごとの特徴をまとめる。

#### (3) 社会言語学的考察

最後に本論で取り上げた言語景観の事例について、歴史社会言語学の立場から考察を加える。考察は言語景観と社会とのかかわり方をめぐって次の6つの視点に絞って行う。①多言語社会、②言語の威信・規範、③言語変化、④産業形態、⑤建築様式、⑥市場経済。これらの視点を通して、百年前頃の上海の言語景観に反映されたことばと社会生活の相互作用、多様

な言語景観に影響を与えたさまざまな社会的関数要因および東西言語景観の出会い、接触と融合の歴史的事実を明らかにする。

### 3. 言語景観の事例分析

20世紀初頭頃の上海の言語景観について、その基本的なスタイルによってまず大きく2つのタイプに分けることができる。1つは「伝統的な言語景観」、つまり言語、文字、デザインなどにおいて上海より古い歴史を持つ近隣都市（蘇州、杭州など）の言語景観や19世紀以前の絵画に描かれた街の言語景観との間に継承関係が認められるものである。もう1つは「近代的な言語景観」、つまり言語、文字、デザインなどにおいて欧米文化の影響を受けたもの、同時代の他の都市や19世紀以前の絵画に見られなかった言語景観を指す。本章では、この2つのタイプを中心に、発見された言語景観の写真をケースごとに例示しながら記述と解説を行う。

#### 3.1 伝統的な言語景観

伝統的な言語景観は店舗の形態と密接な関係がある。発見された百年前頃の写真画像を見る限り、当時中国の伝統的な店の形態には「開放型店舗」と「閉鎖型店舗」の2つのタイプが存在していた。開放型店舗は店の正面が道路に面し、外部からある程度店舗内の様子や商品のサンプルが見え、出入りがしやすいような造りであったが、閉鎖型店舗はまわりが高い壁に囲まれ、外から店舗の中が見えず、中央の扉をくぐってはじめて店舗内の様子や扱う商品が目映る構造となっていた。この2つのタイプの店舗には、それぞれ異なる言語景観が形成されていた。

##### 3.1.1 開放型店舗の言語景観

開放型店舗の言語景観について、以下の4つの事例を通して、その実態の記述を行う。（同タイプ内の事例配列は撮影の推定年代順に基づく。以下同）。

事例 [1]

撮影時期：1900年頃。

撮影場所：南京路（現南京東路、以下同）、金銀装飾品店「費文元銀樓」の前。

撮影者：不詳（姚2010：278）。



写真 1

記述と解説：(1) 写真には開放型店舗が立ち並ぶ街並みが映っている。画面左側の3階建て店舗は金銀装飾品店「費元銀樓」である。店舗における言語景観の全体配置がはっきり映し出されている。(2) 店舗の言語景観はすべて大小さまざまな横と縦の看板によって構成されている。店のメイン看板は中央入口の上方に設置された横看板で、そこには固有名「費元元」が大きく記され、3階中央の横看板には屋号の「裕記」が表記されている。(右から読む文字の配列は縦書きのルールに従い1字ごと改行したことにより形成された横表示である。以下同)。(3) 縦看板は2種類あり、1種類は1階中央入口の両側にかけてられたもので、両側とも店名「費元元銀樓」が記されているが、もう1種類は階ごとの吊るし看板で、それには店名「文元裕記銀樓」と「文元銀樓」、商品名「滿漢首飾」(滿州族と漢民族のアクセサリ)やサービス内容「加煉修業」(改造修理)、「兌換赤金」(純金両替)などが記されている。左端には隣接雑貨店の店名看板「新泰祥號」が映っている。(4) 当店は1896年に開業し、1930年代に新店舗増設による模様替えや「老文元」への改名が行われたが、1947年に内戦中中華民国政府による貴金属営業規制により廃業となった。(5) この景観の主な特徴は木製看板に文字が浮き彫りに刻まれることや、店頭看板と文字が整然と左右対称に配置されることである。

## 事例 [2]

撮影時期：1905 年頃<sup>2</sup>。

撮影場所：南京路（浙江路附近）、食品雑貨店「易安」と衣料品店「大彰」の正面。

撮影者：不詳（姚 2010：275）。



写真2

記述と解説：（1）食品雑貨店と衣料品店が2軒並ぶ光景が映り、両方とも1階は店舗、2階は喫茶室となっている。（2）写真に映った言語景観には横看板と縦看板の2種類があり、両店舗とも店頭中央上方外壁に木彫りのメイン看板が配置され、それぞれ店名「易安」と「大彰」が記されている。（3）吊るしの縦看板には「易安」店では「中西茶（食）」（中国と西洋の茶菓子）、「…糖菓」（…飴菓子）、「大彰」店では布地「哆囉呢」（ウール）、「嗶嘰絨」（毛織）、「羽毛緞」（シルク）などの商品名が書かれている。（「…」は文字内容が不明な部分。以下同）。「大彰」店の1階店舗の天井近くにも横看板が配置されているが、文字情報は判別できない。（4）この景観は1914年頃に同じ場所で7階建ての大型デパートビル「先施公司」の建設が始まることにより姿を消した。

## 事例 [3]

撮影時期：1909年。

撮影場所：河南路33号，服屋「萃豊衣荘」の前。

撮影者：不詳（潘2001：167）。



写真3

記述と解説：（1）道路の両側に店舗の看板が連なる光景が映っている。画面右側の服屋の店舗正面には文字が書かれた旗と看板が配置されている。（2）道路中央に垂れる旗には店名「萃豊絹緞衣荘」（萃豊絹織服屋），店の中央上方にはメイン看板として「萃豊衣荘」と表示され，入口の両側の壁には木彫りの文字「萃豊衣荘」と「絹緞衣局」がそれぞれ配置されている。2階の袖看板には「（萃豊）絹緞衣荘」，軒先の吊るし看板には<sup>4</sup>枚とも「萃豊衣荘」と記されている。（3）この店の言語景観の特徴として各種看板や旗を含む9ヶ所にほぼ同じ内容の店名情報が繰り返し表示され，一種の反復による広告効果がねらわれていたと見られる。

## 事例 [4]

撮影時期：1909年。

撮影場所：租界地内，酒屋「京東明酒棧」と書画表装店「庵華堂」の前。

撮影者：Thomas C. Chamberlin (1843-1928) アメリカ人地質学者（伊2012：214）。



写真4

記述と解説：(1) 写真4は，道路名の特定はできないが，租界地内商店街の一角である。言語景観は全体として各種横と縦の看板と旗によって構成されている。(2) 左側の店は酒屋で，店中央上方に設置された木彫りのメイン看板には店名「京東明酒棧」が記されている。1階店頭上の軒先には縦看板が数枚吊るされ，それぞれには横書きの固有名「京東明」の下に大きく酒の銘柄「紹酒」「京莊」「高粱」が縦書きで記されている。(3) 右端には書画表装店の旗が道路中央に伸ばして垂れている。旗には横書き店名「庵華堂」と「專做」(専門的に扱う)の下に縦書きで「軸對」(対の掛け軸)と大きく書かれている。(4) 酒屋と表装店の間にもう一軒の店があり，店名は不明だが，その旗の裏側には「…老店 鷄蛋餅 …分店」(…老舗 たまご煎餅 …支店)と記される。画面左端の縦看板には「染坊」(染屋)と記されている。

### 3.1.2 閉鎖型店舗の言語景観

閉鎖型店舗は建築様式として外側が高い壁に囲まれるため，その言語景観は基本的に門の周辺と外壁に書かれた文字情報に反映される。以下4つの事例を通してその実態の記述を行う。

## 事例 [5]

撮影時期：1890年。

撮影場所：南京路，食品雑貨店「大生號」の前。

撮影者：John Charles Oswald イギリス人，1897年駐福州オランダ領事就任（劉2012：142）。



写真5

記述と解説：(1)写真には閉鎖型と開放型の店舗が軒を連ねている。(2)左側の閉鎖型店舗の入口正面上方に石彫（か煉瓦彫）の門構えと浮き彫りの店名「大生號」が記されている。(3)門の両側の白壁に大きく「閩廣洋糖」（福建と広東の砂糖）、「浙甯茶食」（浙江寧波の茶菓子）と書かれている。1つの漢字のサイズは人間の背丈ほど大きく、遠い距離でも文字内容が読め、街の景観として大きな存在感を示している。

## 事例 [6]

撮影時期：1900年頃。

撮影場所：南京路，食品雑貨店「邵萬生號」と漢方の薬屋「呉益生堂」の前。

撮影者：不詳（松原 1901 口絵 8）。

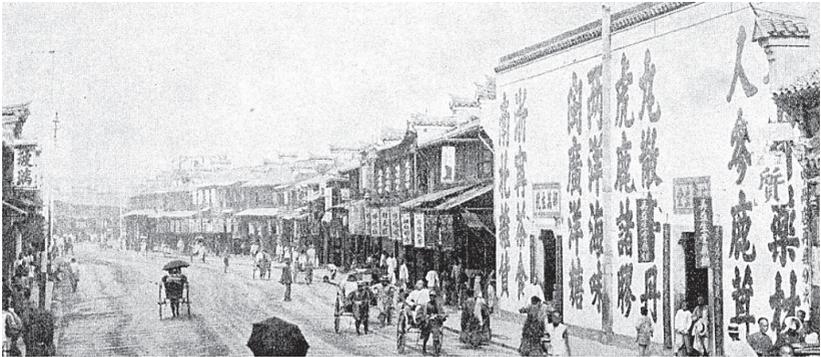


写真6

記述と解説：（1）写真の右側には閉鎖型店舗が2軒並ぶ光景が映っている。（2）右端の店舗は漢方の薬屋で入口上方には固有名「呉益生堂」，両側の袖看板には「呉益生堂薬舗」，外壁には「各省薬材」（各省の薬材），「人參鹿茸」（高麗人參，鹿角），「丸散膏丹」（練薬，粉薬，膏薬，錠剂），「虎鹿諸膠」（虎骨と鹿角エキスのかわ）と記される。（3）左側の店舗は食品雑貨店で，入口上方には固有名「邵萬生號」，門の両側の縦看板文字は判明できないが，両側の外壁には「兩洋海味」（東洋と西洋の海産物），「閩廣洋糖」（福建と広東の砂糖），「浙甯茶食」（浙江寧波の茶菓子），「南北雜貨」（南北の雜貨）と記されている。（4）「邵萬生」は1852年上海呉淞路で開業し，その後南京路に移転した。写真6は移転後間もない頃の映像と見られる。この景観は1940年代頃店舗が南京路414号への再移転と洋風店舗ビルの建設に伴い，姿を消した。

## 事例 [7]

撮影時期 :1900 年代頃。

撮影場所 :新開路, 薬屋, 土木建材店と醸造食品店「張振新」の正面。

撮影者 :不詳 (姚 2010 :273)。



写真7

記述と解説 : (1) 写真には閉鎖型店舗が3軒立ち並ぶパノラマ映像が映っている。(2) 左側の店舗は、漢方の薬屋で、固有名は判別できないが、門の両側の壁には商品種類「丸散膏丹」(練薬, 粉薬, 膏薬, 錠剂), 「各省薬材」(各省の薬材) が書かれている。(3) 中央の店舗の名前もはっきり見えないが, 入口両側の壁に「自運川礪名土」(当店調達良質の土砂), 「揀選大小洋貨」(精選各種舶来雑貨), 「川廣桐油」(四川と広東の桐油) と書かれることから, 土木建材店と見られる。(4) 薬屋と土木建材店の入り口の両側に縦看板がかけられているが, その文字情報は読み取れない。(5) 右側の店は酒, 醬油, 酢, 味噌などを販売する醸造食品店で, 門の上方には固有名「張振新」と記され, 右端の壁面には「官醬園」(公認醸造店) とだけ大きく書かれている。

## 事例 [8]

撮影時期：1910年代中頃。

撮影場所：新閘路，醸造食品店「永泰官醬」の前。

撮影者：不詳（姚 2010：524）。



写真8

記述と解説：（1）写真には閉鎖型店舗と住宅が立ち並ぶ光景が映っている。（2）店舗の正面入口上方に石彫（か煉瓦彫）で「余永泰」と彫られ、両側の壁面に固有名「永泰」と専売認可を意味する「官醬」（公認醸造）が書かれている。（3）通行人や門構えとの比較で漢字1つのサイズは3メートル四方以上と推定され、言語景観として大きなインパクトを持っている。

### 3.2 近代的な言語景観

上海の租界は文字通りイギリスを始めとする諸外国が清朝政府から租借した地域であった。1845年以降の数十年の間に揚子江デルタ地帯先端に位置する黄浦江河辺に住宅、工場、オフィス、ホテルなどの洋館が次々と建設された。その頃の写真には、ビルの壁面に英語の表記（「COMPANY」、 「FACTORY」、 「HOTEL」など）が点在する画像が発見されることはあるが、店頭が連なるような言語景観はなかった。19世紀末頃になると、商店街の形成により、前述の伝統的な言語景観とほぼ同時に、言語、文字、デザインなどにおいて西洋文化の影響を受けた近代的な言語景観が次々と出現した。近代的な言語景観は、さらに言語の使用状況により単一言語使用のケースと複数言語使用のケースという2つのタイプに分けることができる。以下はこの2種類の近代的な言語景観の実態、その言語、文字、意味

内容、店舗オーナーの属性および時代的、社会的背景などについて解説する。

### 3.2.1 単一言語使用

近代的な言語景観における単一言語使用のケースには、中国語が使用される場合と英語が使用される場合とがある。以下4つの事例を通してその実体の記述を行う。

事例 [9]

撮影時期：1900年頃。

撮影場所：南京路573号、写真用品店「DENNISTON & SULLIVAN」の正面。

撮影者：不詳（李2006：136）。



写真9

記述と解説：(1) 写真は英米人オーナー（LL.HopkinsとJ.J.Gilmore）の写真用品店の正面映像である。入口の真上には横に伸びる凸型のメイン看板が設置されている。看板の中央上部には英語で「PHOTO SUPPLIES KODAKS ETC.」（写真用品，コダックなど）と書かれ，その下には店の創業者らの名に因んだ固有名「DENNISTON & SULLIVAN」が表記されている。(2) 入口両側のショー・ウインドーの上にも英語の看板があるが，左側の文字内容の一部は不明だが，中央には「ARTS & CRAFTS」（美術工芸品），右側には「KODAKS FILMS ETC.」（コダックフィルムなど）と記されている。(3) 角度の異なる別の写真で確認したところ，この店の正面左側の2階の窓枠の上にもメイン看板よりも大きい看板「PHOTO

SUPPLIES」(写真用品)が設置されている。(4) 文献上この店の中国語名は「美泰洋行」と記載されるが、店頭周辺には英語以外の言語による表記は見当たらない<sup>3</sup>。(5) メイン看板と右側ショー・ウインドー上の看板の文字フォントはセンチュリー・ゴシック (century gothic) 体, 左側のショー・ウインドー上の看板はバート (bart) 体で表記されている。

#### 事例 [10]

撮影時期：1901年7月16日。

撮影場所：南京路（雲南路との交差点付近），自転車屋「踏飛」の店頭一角。

撮影者：不詳（鄧 1996：62，湯 2014：71）4。



写真 10

記述と解説：(1) 中国人オーナーの自転車屋の店頭映像が映っているが、店頭で使用された言語で確認できるのは中国語のみである。(2) 入口上方にメイン看板が掲げられ、看板の使用言語は判別できないが、その形状には西洋化の影響が見られ、文字情報の伝達よりも一種の洋風な装飾効果がねらわれたものと見られる。(3) 2階の正面と側面の壁面にはいずれも商店の固有名「踏飛」と業種名「腳踏車行」（自転車屋）が書かれ、1階の正面と側面には、一部の文字は判別できないが、同じ内容で「本行在名廠（製造）頭等脚（踏車），久已中外馳名比衆格外……」（本店は有名メーカー製造の高品質自転車，すでに国内外で名を馳せ，他の店より格別に……）と書かれている。(4) 本事例は中国語（漢字）を使いながら，伝統的な言語景観のパターン（開放型店舗の吊るし看板や閉鎖型店舗の巨

大な文字など)には当てはまらない。商品アピール用のポスター絵と広告宣伝文言が人目を引き、自由で新鮮な感覚を取り入れた中国語による単一言語使用の(または中国語を中心とする)近代的な言語景観と言える。(5)店頭景観とは別に、壁には路名標識がつけられ、上が英語「YUNNAN ROAD」、下が中国語「雲南路」と表記されている。

事例 [11]

撮影時期：1905年12月18日。

撮影場所：南京路375, 374号, タクシー会社の「LEE.TAI」の正面。

撮影者：不詳, (1906年2月3日のフランス新聞「L'ILLUSTRATION」掲載, 徐2011:227)。



写真 11

記述と解説：(1) 写真 11 はイギリス人オーナーのタクシー会社「LEE.TAI」の正面映像である。(2) 並ぶ2軒の店頭には2種類の看板が映り、左側は壁文字、右側はメイン看板で、いずれも英語の固有名「LEE.TAI」が表記されている。(3) メイン看板の下に小さな文字が書かれているが、内容は判読できない。(4) 左側の固有名英文字はゴシック体、右側はブックマン・オールドスタイル (bookman old style) 体で記されている。

## 事例 [12]

撮影時期：1920年代後半。

撮影場所：静安寺路（現南京西路，以下同），婦人服洋裁店「雲裳」の正面。

撮影者：不詳（王 2003：40）。



写真 12

記述と解説：（1）写真は中国人オーナーの婦人服洋裁店の正面映像であるが、店舗2階窓の上部壁に凸型メイン看板がかけられ、それには右からの表記で一番上は固有名「雲裳」、その両側には「出租禮服」（礼服レンタル）と「特式新裝」（ファッションブランド）と書かれ、その間には小さい文字でサービス内容「專製皮貨大衣」（毛皮コート特注）と表記されている。（2）店頭真上の雲の形をデザインした看板には固有名「雲裳」と示され、その下には中国語（上海方言）ローマ字表記「YUNG ZONG」と英数字「TEL:3519」が記されている。（3）最小限の英数字が含まれるものの、看板全体の表示内容を考えると、中国語による単一言語使用の言語景観と位置付けることができる。

### 3.2.2 複数言語使用

複数の言語が使用される事例には、中国語と英語の二言語使用のケースと、英語、中国語とドイツ語の三言語使用のケースが発見されている。以下6つの事例を通してその実態を記述する。

## 事例 [13]

撮影時期：1900年頃。

撮影場所：勞合路（現六合路）と南京路の交差点付近，写真館「麗華」の一角。

撮影者：不詳（Bennett 2014：33）。



写真 13

記述と解説：（1）中国人オーナーの写真館店頭の様子が映っているが、2階バルコニーの外側の正面と側面に「麗華照像放大公司」（麗華撮影拡大会社），その下には小さな英文字で「LAIWAH PORTRAIT」（麗華肖像写真）と表記されている。固有名ローマ字表記「LAIWAH」は広東方言の発音に基づくものである。1階の店頭外壁の正面には縦書きで「麗華照像放大公司」と記されている。（2）1階角の壁面上方に路名標識が付けられている。拡大画像で確認したところ，上が英語，下が中国語で，左側は「LLOYD ROAD 勞合路」，右側は「NANKING ROAD 南京路」となっている。（3）店頭景観と道路の表記はいずれも英語と中国語による二言語使用となっている。

## 事例 [14]

撮影時期：1902 年。

撮影場所：南京路 371 ～ 373 号，商業用雑居ビルの正面。

撮影者：不詳（劉，凱倫 2010：61）。



写真 14

記述と解説：（1）写真 14 はパン屋と新聞社が入る商業用雑居ビルの正面玄関の映像である。（2）写真中央のパン屋の正面壁には中国語で商品名「麵包」（パン）、「食物」（食べ物）が書かれている。パン屋の右隣で 1 階の新聞社の正面には横看板に「繁華報館」（繁華新聞社）と書かれる。2 階の新聞社看板と 1 階入り口の両側には中国語名「蒙學報館」（蒙学新聞社）と記され、横看板の下にはアルファベットが表記されている。右端の窓枠の上には、内容は確認できないが、英文字が使用されている。（3）左端はタクシー会社「Ford High Services」の店頭で、その入り口の正面壁中央には中国語社名「（雲）飛」と英語の説明文が書かれている。（4）商業雑居ビルの玄関風景として中国語と英語が混在する近代的な言語景観を織りなしている。

## 事例 [15]

撮影時期：1905年12月18日。

撮影場所：南京路371～373号、タクシー会社「雲飛」の正面。

撮影者：不詳、(1906年2月3日のフランス新聞「L'ILLUSTRATION」掲載、徐2011：227)。



写真 15

記述と解説：(1) 写真15は写真11の右側につながる部分で、写真14とは反対側の角度から撮影された同一の雑居ビルの玄関風景である。(2) 写真15の左側はアメリカ人オーナーのタクシー会社「Ford High Services」(「雲飛」)の事務所店舗である。店舗には中国語と英語の二言語表示が採用されている。2階中央の壁には中国語固有名「雲飛」が縦書きのメイン表示として大きく記されている。その上にはローマ字表記「YUEN FIE...C」, その下には、内容は判別できないが、英語の説明文と思われる文章が表記されている。(3) 写真の右端はパン屋と新聞社で、その言語景観の一部は3年前に撮影された事例(14)と重なる。

## 事例 (16)

撮影時期：1910年代。

撮影場所：静安寺路 262～266号、洋服・洋裁店「協鋸」の正面。

撮影者：不詳 (王 2003: 40)。



写真 16

記述と解説：(1) 写真は 1872 年に開業した中国人オーナーの洋服・洋裁店「協鋸」の正面映像である。(2) 2階バルコニーの外壁にはメイン看板が掲げられ、中央上部には中国語固有名「協鋸」、その下には英文ローマ字表記で会社名「A YA CHONG & CO」、さらにその下には「TAILOR & OUTFITTER & WOOLLEN MERCHANT」(洋裁, 洋装, ウール卸売), 右端には英語の住所「262-266.WELL RD」が記されている。(3) 正面屋根上の看板には「TAILOR & OUTFITTER & EXPERIENCED HAT MAKER」(洋裁, 洋装, 熟練帽子製造職人)と記されている。2階の縦看板と1階店頭柱にはそれぞれ英文店名「A YA CHONG」が記されている。店頭上部には「A YA CHONG CO.」の上に中国語「協鋸呢絨西服…」(協鋸ウール洋服…)と小さく記されている。(4) 固有名「協鋸」のローマ字表記「A YA CHONG」は広東方言の発音に基づいている。(5) この景観は全体的特徴として中国語固有名をメイン看板の中央に据えながらも英語を基調とする二言語使用景観である。

事例 [17]

撮影時期：1920年代。

撮影場所：静安寺路425号、洋裁店「王順昌洋服號」の正面。

撮影者：不詳（王2003：40）。



写真 17

記述と解説：（1）写真17は中国人オーナーの洋裁店正面映像である。2階バルコニーの外壁には、固有名の中国語（上海方言）ローマ字表記「WONG ZUNG CHONG」、その下には英語「TAILOR」（洋裁）と漢字固有名「王順昌」がそれぞれ記されている。店頭真上のメイン看板の中央には固有名ローマ字表記「WONG ZUNG CHONG」、その下には英語「TAILOR AND OUTFITTER」（洋裁と洋装）、メイン看板の両側には店の中国語固有名縦書き「王順昌」とそれぞれ表記されている。（3）店頭の縦看板4枚には中国語店名「王順昌洋服號」とそれぞれ記され、店頭前の歩道に設置された柱の広告ボードにも縦書きで「WONG ZUNG CHONG」と記されている。（4）店頭の日言語使用の景観として、横長のスペースには主に英語、縦長のスペースには主に中国語が表示されることや、中国語表示が厳格に左右対称に配置されることが特徴的である。

事例 [18]

撮影時期：1920年代頃。

撮影場所：南京路 98～114号（四川路との交差点），百貨店「惠羅公司」の正面。

撮影者：不詳（史 1996：195）。



写真 18

記述と解説：（1）写真は 1904 年にオープンした百貨店「惠羅公司」（Whiteaway, laidlaw & Co. Ltd.）の映像である。オーナーは二人のイギリス人 Whiteaway と Laidlaw である。（2）ビル 1 階正面入口には中国語名「惠羅公司」2か所と英語名「Whiteaway, laidlaw & Co. Ltd.」が表示される。（3）2～4 階窓上の壁面には中国語と英語による店のモットー「質地 QUALITY」（品質）、「價值 VALUE」（価値）、「服務 SERVICE」（サービス）が表示されている。中国語は英語の上に位置づけられている。正面 2 階の外壁には英語の説明文「THIS WEEK…」などが書かれている。（4）「質地」「價值」「服務」の漢字はゴシック体で表示され、当時の言語景観に使用された漢字の書体としては目新しいものだったと言える。

事例 [19]

撮影時期：1920年代後半頃。

撮影場所：静安寺路 1178 号，西洋医学の薬局「REGAL PHARMACY」の正面。

撮影者：不詳（王 2003:48）。



写真 19

記述と解説：(1) 写真 19 はドイツ人オーナーの薬局の正面映像である。店頭には英語，中国語とドイツ語による三言語使用の景観が映っている。(2) 店頭一番上の中国語の看板には「德商利亞藥房」（ドイツ商人利亞薬局）と表記され，固有名「REGAL」の音訳として「アジアに利益をもたらす」という意味を持つ漢字「利亞」があてられている。「利亞」は外の漢字よりやや大きく表示され，文字列の中央に赤十字マークを入れることにより中国文化好みの左右対称性が示される。(3) 中国語看板の下にメイン看板として英語「REGAL PHARMACY」（REGAL 薬局）がゴシック体で大きく記されている。ショー・ウィンドーのガラスにも英語「Pharmacy」，その下に薬品名らしい文字が示されている。(4) 店頭の最下位，ショー・ウィンドーと地面との間のスペースにはブックマン・オールドスタイル字体のドイツ語「APOTHEKE」（薬局）が記されている。

### 3.3 事例分析のまとめ

以上 19 の事例を通して、上海の都市形成期における言語景観は、言語、文字、意味内容、デザインなどにおいて、豊かな多様性を持っていたことがまず分かる。スタイルがまったく異なる 2 種類の言語景観（中国の伝統的な言語景観と西洋化した近代的な言語景観）が同じ租界地域内に出現し、共存していたことがその時代の言語景観に見られる最も顕著な特徴だと言える。両タイプの言語景観のそれぞれの特徴について次のようにまとめることができる。

#### 3.3.1 伝統的な言語景観の特徴

(1) 使用言語はすべて単一言語の中国語であった。(2) 使用文字はすべて漢字で、書体はすべて毛筆体の楷書であった。(3) 開放型と閉鎖型という 2 つのタイプの店舗が存在し、それらの言語景観もそれぞれ異なる方法で可視性 (visibility) と顕著性 (salience) 機能を果たしていた。開放型店舗では各種横と縦の看板や旗が多用され、文字内容の繰り返しによる印象強化がねらわれ、閉鎖型店舗では白壁に書かれた巨大な文字で視覚に訴えるアピール効果がねらわれる傾向が見られた。(4) 看板の配置や文字の配列には左右対称性が重んじられていた。

#### 3.3.2 近代的な言語景観の特徴

(1) 単一言語使用と複数言語使用のケースがあり、複数言語使用には二言語使用と三言語使用の現象が観察された。単一言語使用では中国語か英語、二言語使用では中国語と英語、三言語使用では英語、中国語とドイツ語がそれぞれ使われていた。(2) 二言語使用の場合のメイン看板は中国語であったり、英語であったりしたが、三言語使用の事例におけるメイン看板には英語が使用されていた。(3) 看板における中国語固有ローマ字表記は上海方言、広東方言の発音に基づいていた。(4) 中国語が使用された場合の文字配列の左右対称性重視や縦書きの毛筆体使用など伝統的な要素が含まれながらも、言語の選択や文字のデザイン、配置などにおいて個性化、多様化の傾向が見られた。

#### 4. 社会言語学的考察

言語景観は、書きことばの一形態であり、公共空間において言語と社会との関係を可視的に示す一種の関数集合体である。百年前頃の上海の言語景観は租界という特定時代の特定地域におけることばと社会生活の相互作用の現れである。当時上海の言語景観の形成に多くの社会的関数要因が複雑に絡み合っていて影響を与えていたが、以下は主に6つの視点から考察を加えたい。

##### 4.1 言語景観と多言語社会との関係

写真画像を見る限り、百年ぐらい前の上海の街には、事例 [1] ~ [8], [10], [12] が示すような中国語による単一言語使用と共に, [9], [11] のような英語による単一言語使用, [13] ~ [18] のような二言語使用, そして [19] のような三言語使用の景観が現れていた。景観の作り手である店のオーナーのアイデンティティと言語選択との関係を見れば、伝統的な言語景観はすべて中国人オーナーの店に現れたが、近代的な言語景観の中で、英語による単一言語景観は [9] と [11] のように英米人オーナーの店に現れ、英語と中国語による二言語使用の景観は英米人オーナーの店 [15], [18] と中国人オーナーの店 [16], [17] に現れていた。そして、三言語使用の景観は事例 [19] のようにドイツ人オーナーの店に現れていた。さらに、商業的言語景観の外に事例 [10] と [13] には3か所の路名標識が映り、いずれも上が英語、下が中国語の二言語表記で統一されている<sup>5</sup>。これらの事例から、百年前頃の上海の言語景観全体は、中国語と英語の二言語社会の形成を反映しつつ、多言語使用の様相を含む多様な景観スタイルを呈し、当時の上海共同租界地域内での多文化、多国籍社会の状況をリアルに映し出したとすることができる。Ben-Rafael et al (2006:14) は言語景観の形成について、大きく自然発生的に形成される私的標識による「ボトムアップ (bottom-up) 式」と政策的に実施される公的標識による「トップダウン (top-down) 式」という2つのタイプに分けたが、当時上海の商業的言語景観は主に前者のタイプに属し、租界行政の政策方針を反映した路名標識は後者のタイプに属するとそれぞれ位置づけることができる。

#### 4.2 言語景観と言語の威信・規範との関係

租界はコロニアル時代に中国領内に出現した外国統治地域であった。上海共同租界はその中の1つで、1863年にイギリス租界とアメリカ租界が合併したことにより形成したものである。租界行政の管理機構「工部局」(1863～1943)の理事会メンバーはイギリス人を中心に構成され<sup>6</sup>、行政言語や会議の議事録にも英語が使用されていた。その意味において、英語は当時のオフィシャル言語であり、政治的力関係において高い地位と威信を有していた。移民と植民は先住民にとっていずれも外来住民であるということには変りはないが、移民は一般的に先住民社会の下層に入るのに対し、植民はその社会の上層に入るという点では、両者の間に社会的分布の違いが見られる。移民言語と植民言語との間にも同様の位相の差が存在する。庄司(2009:23)では、移住者の言語が主流言語社会の中で数的な「劣勢の言語」の立場におかれる現象について論じているが、本論で取り上げた景観事例[10]、[13]における路名標識と事例[17]、[19]のような商業看板には植民言語(英語)が威信言語として中国社会に入りこむ姿が映し出されている。

一方、言語の威信には、政治的、軍事的な力関係だけでは説明しきれない複雑な一面もある。百年前の上海において、中国語はオフィシャル言語ではないという意味で租界内では政治的に劣勢であったが、住民のマジョリティ言語として言語景観に広く使用され、大きな存在感を示していた。Trudgill(1983:169～185)は、ノルウェー英語における社会的立場の低い層に現れる音韻異形が話者の意識以上に広く使用される実態について、その社会的関数要因として「隠れた威信」(covert prestige)という概念を導入して解釈したが、欧米人オーナーが中国語を英語と併記したり、メイン看板に使用したりする事例[15]、[18]、[19]が示すように、中国語は当時英語優位の租界地域において、言語使用人口の数の力<sup>7</sup>、伝統的な文字文化の力という要素があずかり、ある種の「隠れた威信」の様相を呈していたとすることができよう。

漢字の書体には毛筆体と印刷体があり、毛筆体には篆書、隸書、楷書、行書、草書などがあり、印刷体には宋体、明朝体(「倣宋体」)、ゴシック体(「黒体」)などがある。本論で取り上げた19の事例が示すように、百年前頃の上海言語景観の中で漢字はほとんど(17例中16例)毛筆体の楷書で表記された現象が観察された。この事実から当時において各種書体の中で楷書

は看板の文字スタイルとして絶大な人気を博し、書体の規範として高い威信を有していたことが示されている。それと同時に、例 [9], [11] が示すように英語と共に新しい文字フォントがもたらされた現象も観察され、[18] が示すように 1920 年代頃の近代的な言語景観にはゴシック体漢字が現れていた。この事例は、当時の言語景観において漢字の書体が英語の文字フォントの影響を受け、毛筆体から印刷体へと変わり始めた現象として受け止めることができる。

中国語の漢字表記は発音の縛りがゆるく、読み手によりめいめいに方言音で再生されることは可能である。つまり漢字には中国語方言間の激しい音声的、音韻的差異を超越する伝達機能が備わっている。したがって、漢字が使われた言語景観には地域変異の問題は表面化されない。しかし、英語による言語景観の中で固有名がローマ字で表記される場合には、店舗オーナーのアイデンティティ、実際に発せられた音声言語に近い発音が表記に使われるため、方言の選択問題、表記の音声規範の問題が浮上することになる。本論で提示されたローマ字表記の事例の中で [12], [17] が上海方言音、[13], [16] が広東方言音に基づく現象はその事実を反映したものである。方言音の使用には当時中国とりわけ上海の租界地域において北方方言をベースとする共通語の規範およびその規範に基づくローマ字表記の基準が確立されていなかった事実が反映されている<sup>8</sup>。

#### 4.3 言語景観と言語変化との関係

言語の共時態は、どの時代のものにせよ、刻々と変化することばの流れの一断面を切り取ったもので、言語分析のための一種の作業仮説である。切り取られた言語の共時態はその言語が持つ音韻、語彙、文法などの諸要素の過去の変化が辿りついた帰結であり、未来へとつながる新しい変化の始まりを示すものでもある。そして、その共時態内部にも時間の推移による通時的変化の要素が常に混在する。本研究では百年前頃の上海の 40 年間 (1890 ~ 1929 年) の言語景観を 1 つの共時態として切り取ったが、対象となる共時的言語景観の中にも通時的変化の側面が観察された。伝統的な言語景観は事例 [1] ~ [7] が示すように主に 40 年間の前半つまり清朝末期の 22 年間 (1890 ~ 1911 年) に撮影されたもので、一部は事例 [2] のように早くも 1910 年代に消えたものもある。われわれは 18 世紀に描かれた図 1 「姑蘇繁華圖 (部分)」 (1759 年) の蘇州の商店街景観に伝統的な

言語景観の原型となるものを見出すことができる。



図 1

一方、近代的な言語景観は事例 [9] ~ [11], [13] ~ [15] が示すように 40 年間の前半に撮影されたケースに加え, 事例 [12], [16] ~ [19] のように 40 年間の後半つまり民国初期の 18 年間 (1912 ~ 1929 年代) に撮影されたケースも発見されている。これらの事例から上海言語景観の形成は, 租界地とは言え, 最初から近代的な景観が広範囲に現れたというよりも, むしろまずは旧市街地に隣接する広大な空き地に伝統的な景観と近代的な景観がほぼ同時に出現し, 伝統的な景観が大きな勢いで広がったのちに, 徐々に近代的な景観に浸食され, 変容していったという歴史の変遷のプロセスが見える。のちに撮影された写真を見れば, その通時的変化の事実が一層はっきり分かる。比較するために 1940 年頃に撮影された写真 20 を 1 例として上げる。写真 20 には写真 6 (1900 年頃) とほぼ同じ場所が撮影されているが, かつてインパクトがあった伝統的な言語景観 (食品雑貨店「邵萬生號」) が 40 年後には周囲に洋風の建築景観に囲まれ, 存在感を失いかけていた姿が捉えられている。



写真 20

つまり、上海近隣の都市景観と40年を越える長いスパンを含めて考えると、伝統的な言語景観は過去の景観に、近代的な言語景観は未来の景観にそれぞれつながり、両者は百年前頃の40年間という共時態の中で重なって現れているながらも、それぞれ異なる通時的变化の流れを汲んでいた側面が観察された。

#### 4.4 言語景観と産業形態との関係

事例 [1] ～ [8] の言語景観の表現内容から、それらの店舗はそれぞれ金銀装飾品店、衣料・衣服店、食品雑貨店、醸造食品店、漢方の薬屋、土木建材店、書画表装店、酒屋、染屋などであることが分かる。つまり、伝統的な言語景観は、主に伝統的な手工業製品を販売し、そのサービスを提供する店舗に現れる事実が見える。一方、事例 [9] ～ [19] の言語景観の表現内容から、それらの店舗は美術工芸品・写真用品店、写真館、タクシー会社、自転車屋、パン屋、新聞社、洋裁・洋服店、百貨店、西洋医学の薬局などであることが分かる。つまり、近代的な言語景観は、主に当時の新興産業、外来産業の製品を販売し、そのサービスを提供する店舗に現れるという事実が見えてくる。これらの事実から、20世紀初頭頃において上海の言語景観は商店が提供する商品やサービスの性質およびその背景にある産業形態に影響を受けていたことが明らかである。

#### 4.5 言語景観と建築様式との関係

事例 [1] ~ [4] に見られる言語景観 (大量の吊るし看板など) は木造建築の開放型店舗が持つ軒下のスペースの利用が前提となっていた。一方, 事例 [5] ~ [8] に見られる言語景観 (白壁に巨大な文字) は閉鎖型店舗が持つ外壁のスペースに依存していた。そして, 当時の産業形態の変化は建築様式の変化にも影響を与え, 新しい産業製品を販売する店舗には新しい建築様式が採用され, 事例 [9] ~ [19] の言語景観は西洋型建築のガラス窓やショー・ウィンドーの周辺壁面スペースが利用されていた。つまり, 建築様式が異なれば, 言語景観が存立する物理的条件, 表示スペースの形態も異なり, 言語景観のスタイルも異なっていた。これらの事実から, 当時の言語景観は産業形態と共に建築様式からも影響を受けていたことが分かる。

#### 4.6 言語景観と市場経済との関係

井上 (2009: 67, 75) では東京の商業施設における言語景観には経済原理が反映されやすく, 看板内の諸言語の順番も市場価値, 経済性によって付けられることが指摘されたが, 上海の歴史言語景観においても同じ傾向が見られた。看板の掲示は商業活動の一環であり, 読み手としての通行人に対して, 店舗の存在を周知させ, 商品への理解を促し, 好印象を与え, 来店を招致し, 販売を促進するというプロセスを通して一種の経済的, 商業的価値を創出する役割を持っている。百年前頃の上海の言語景観において言語種類の選択, 使用看板の数量, 文字サイズ, 書体デザイン, 配置順番と位置などの要素は経済効果を最大限にするための具体的な担い手だったと言える。事例 [3], [16], [17] などは各種看板や文字情報を繰り返し表示することで店舗の名前を周知させ, 事例 [5] ~ [8] は巨大で, 端正な楷書文字で店舗の存在と正統性をアピールし, 事例 [10] は商品宣伝用のキャッチコピーや斬新な景観デザインで人目を引き, 事例 [18] は経営理念, モットーの掲示により商品や商店の信用を高め, それぞれ異なる形で経済的価値の創出に寄与していたことが分かる。

事例 [19] に反映された言語景観と市場経済とのかかわりについて, 次のように考察することができる。まず中国語の看板を店頭が一番上位に配される事実から, 顧客層 (または潜在的顧客層) であるマジョリティ市民の母語に対する配慮が示されたと見る事ができる。そして英語の看板が

中国語の下に配置されるものの、メイン看板として外枠も字も中国語看板より大きく作られる事実には、共同租界の行政使用言語、威信言語としての英語の優位な立場が反映されていたことも明らかである。中国語と英語看板が持つ顕著性、情報の伝達効果に比べ、オーナーの母語であるドイツ語の表記は店頭の最下位に配置され、字も英語看板より小さく表示されている。この事実には、ドイツ系住民のマイノリティとしての立場が反映されると同時に、オーナーの母語に対する控えめなプレゼンスはある種の謙虚さにもつながり、非ドイツ系の欧米市民やマジョリティの中国人市民の間で好感が持たれ、その結果、顧客招致という市場価値の創出がもくろまれていたのだろうと分析することができる。事例 [19] の景観制作者（店のオーナー）は、当時上海の多言語社会におけるオフィシャル言語（英語）、マジョリティ言語（中国語）とオーナーの母語（ドイツ語）の配置について工夫を凝らし、言語景観がもたらす経済効果を政策的に計算し、巧みに調節していたことが分かり、経済原理が言語景観の形成に大きな役割を果たしていた一面が観察された。

## 5. 終わりに

以上、歴史社会言語学の視点から、発見された写真画像を事例に、百年前頃の上海の言語景観に対する分類と記述を行い、それらに反映されたことばと社会生活の相互作用について考察した。この考察により、上海都市形成期における東洋と西洋の言語景観の出会い、接触と融合のプロセスが垣間見え、当時の言語景観のバラエティに富んだ実態の一部が明らかになった。歴史言語景観をより正確に、包括的に捉えるためには今後さらに多くの事例を発見し、収集する必要がある。上海の言語景観は、その後ロシア系、日系住民の流入により激しく変貌し続けていったが、その追跡研究も今後の課題として残っている。

### 注：

1. 「中華民国政府」は1949年以降台湾に移り、いまでもその名、その実体が存続している。
2. 撮影年は菊地（2012）の中国語版（陳訳2012：82）の表記が参考となった。
3. 夏（2011：291）には異なる角度の写真や「美泰洋行」に関する情報が掲載されている。
4. 写真はより鮮明な画像をもつ鄧（1996）により、撮影の日付はより詳細で正確な記述をもつ湯（2014）による。
5. 租界工部局1866年3月14日の会議議事録には英語と中国語の路名標識配置に関す

る指示が議題になっていた。(上海市档案馆編 2001a : 292)。

6. 上海租界志編纂委員会 (2001 : 185) によれば、工部局の理事 (9 名) は、1890、1900、1910 年にはいずれもイギリス人 7 名、アメリカ人 1 名、ドイツ人 1 名により構成されていた。1920 年にはドイツ人の代わりに日本人 1 名が選出されていた。
7. 上海租界志編纂委員会 (2001 : 117) の統計によると、共同租界の中で 1900 年の総人口は 352,050 人で、その内中国人は 98% の 345,276 人で、外国人は 1.9% の 6,774 人で、1920 年の総人口は 783,146 人で、その内中国人は 97% の 759,839 人で、外国人は 3% の 23,307 人であった。
8. 租界工部局 1868 年 6 月 8 日の会議議事録には、当時工部局理事でアメリカ人宣教師 Matthew Tyson Yates (1819-1888) に上海の路名、弄堂 (横丁) 名のローマ字表記の修正を依頼した事実が記録されている (上海市档案馆 2001b : 252)。

#### 図像出典：

- 写真 1, 2, 7, 8 : 姚麗旋 2010 『美好城市的百年変遷』上海大學出版社 p278, 275, 273, 524.
- 写真 3 : 潘君祥 2001 『20 世紀初初の中國印象』上海古籍出版社 p167.
- 写真 4 : 伊捷 2012 『近世中國映像資料』(第 1 輯, 第 10 冊) 黄山書社 p214.
- 写真 5 : 劉萍 2012 『近世中國映像資料』(第 1 輯, 第 12 冊) 黄山書社 p142.
- 写真 6 : 松原岩五郎 1901 『磯ちどり』(『女學世界』第 1 卷第 15 号) 博文館 口絵 8.
- 写真 9 : 李新 2006 『老上海 200 旧影』上海人民美術出版社 p136.
- 写真 10 : 鄧明 1996 『上海百年掠影』上海人民美術出版社 p62.
- 写真 11, 15 : 徐宗懋 2011 『辛亥革命現場報道 西洋画刊新聞文献選集』大隗文化出版股份有限公司 p 227.
- 写真 12, 16, 17, 19 : 王國濱 2003 『南京西路一百四十年』上海社会科学院出版社 p40, 48.
- 写真 13 : Bennett, T (泰瑞・貝内特) 2014 『中國攝影史』中國攝影出版社 p33.
- 写真 14 : 劉香成, 凱倫・史密斯 2010 『上海 1842-2010 一座偉大城市的肖像』世界圖書出版公司 p61.
- 写真 18 : 史梅定 1996 『追憶—近代上海圖史』上海古籍出版社 p 124, 195.
- 写真 20 : 飯山達雄 1980 『遙かなる中国大陸写真集 (2)』国書刊行会 p98, (飯山達雄 1940 年頃撮影) .
- 図 1 : 楊東勝 2009 『姑蘇繁華圖』(徐揚 1759 年作) 中國書店 p19.

## 参考文献：

- Backhaus, Peter (2007) *Linguistic Landscapes: A Comparative Study of Urban Multilingualism in Tokyo*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Ben-Rafael, E., Shohamy, E., Amara, M. H., and Trumper-Hecht, N. (2006) Linguistic landscape as symbolic construction of the public space: The case of Israel. *International Journal of Multilingualism* 3(1):7-30.
- Cenoz, J. and Gorter, D. (2009) Language economy and linguistic landscape. In: Shohamy, E. and Gorter, D. (eds) *Linguistic Landscape: Expanding the scenery*. London: Routledge. 55-69.
- Huebner, T. (2006) Bangkok's linguistic landscape: Environmental print, code mixing, and language change. *International Journal of Multilingualism* 3(1):31-51.
- Hult, F. M. (2009) Language ecology and linguistic landscape analysis. In: Shohamy, E. and Gorter, D. (eds) *Linguistic Landscape: Expanding the scenery*. London: Routledge. 88-107.
- Hymes, Dell (1974) *Foundations in Sociolinguistics*. London: Tavistock. (唐須教光訳『ことばの民族誌』紀伊國屋書店 1979).
- Landry, R. and Bourhis, R. Y. (1997) Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality. *Journal of Language and Social Psychology* 16(1):23-49.
- Lanza, E. and Woldemariam, H. (2009) Language Ideology and Linguistic Landscape: Language Policy and Globalization in a Regional Capital of Ethiopia. In: Shohamy, E. and Gorter, D. (eds) *Linguistic Landscape: Expanding the scenery*. London: Routledge. 189-205.
- Trudgill, P. (1983) *On dialect*. Oxford: Blackwell.
- 井上史雄 (2009) 「経済言語学からみた言語景観—過去と現在」庄司博史, バックハウス, クルマス編『日本の言語景観』三元社. 53-78.
- 夏伯銘 (2011) 『上海 1908』復旦大學出版社.
- 菊地敏夫 (2012) 『民国期上海の百貨店と都市文化』研文出版 (陳祖恩訳『近代上海的百貨公司與都市文化』上海人民出版社 2012).
- 龔德慶, 張仁良 (2011) 『靜安歷史文化圖録』同濟大學出版社.
- 上海市档案馆 (2001a) 『工部局董事会會議録』(第2冊) 上海古籍出版社.
- 上海市档案馆 (2001b) 『工部局董事会會議録』(第3冊) 上海古籍出版社.
- 上海租界志編纂委員会 (2001) 『上海租界志』上海社会科学院出版社.
- 庄司博史 (2009) 「多言語化と言語景観—言語景観からなにがみえるか」庄司博史, バックハウス, クルマス編『日本の言語景観』三元社. 17-52.
- 鄒依仁 (1980) 『旧上海人口變遷的研究』上海人民出版社.
- 湯偉康 (2014) 『老上海影集』上海人民美術出版社.
- 彭国躍 (2007) 「近代上海の路名と戦争—歴史社会言語学」『言語』Vol.36・No.4 大修館書店. 92-99.

- 彭国跃 (2015) 「上海南京路上语言景观的百年变迁—历史社会语言学个案研究」『中国社会语言学』第 24 期 商务印书馆. 52 - 68
- 彭国跃 (2017) 「上海南京路上语言景观的百年变迁—历史社会语言学个案研究 (补正)」『非文字資料研究』(第 14 号) 神奈川大学日本常民文化研究所・非文字資料研究センター. 159 - 175
- 彭国躍 (2017) 「「言語景観」研究の可能性について—ことばと社会のインターフェイス」『非文字資料研究センター Newsletter』(No.37). 神奈川大学非文字資料研究センター. 34-35
- 馬長林 (2003) 『租界裏的上海』上海社会科学院出版社.